

新羅 舊都慶州の地勢及び其遺蹟遺物

今 西 龍

緒 言

小生が新羅の舊都慶州を踏査せるは明治三十九年の秋大學院學生として朝鮮に修學旅行せし際にして、慶州に滞在すること十七八日、旅行の期日盡きしかば、其調査を中止して歸京せしが故に、其調査は極めて不完全なるものなりき。これを以て、其發表は再調査の上にてと思ひ、其機を俟ちて四年を経過し、其機を得ず終に不完全のまゝに其概略を昨四十三年七月東洋協會講演會にて發表せり。本稿は此講演の原稿に訂正を加へたるものなり。されば地圖の如きも其後正確詳細なるものを見たれども、小生の不完全なる研究は、其地に於て小生自ら假製せし不完全なる地圖に對照すること宜しけれど、敢て机上の改訂を加へずして、其まゝ之を出せり。讀者其地圖の粗笨なることを諒せられんことを。

小生は旅行に先ち、恩師坪井文學博士より種々御指教を受け、また關野博士の韓國建築調査報告によりて研究上大なる利益を得たり。而して幣原博士の紹介にて知己となりし、鶴林學校教師伊藤藤太郎氏より非常なる世話と種々の教とを受け、又當時釜山理事官たりし松井茂氏、及び在慶州警務部の警部にして今は故人となりし日比治彦氏よりは、身邊の保護を受けたり。若し小生にして少したりとも慶州につきて研究し得たるものありとすれば、是れ實に坪井先生及び伊藤氏等の賜ものなり。

第一、慶州の地勢。

慶州即ち新羅の舊都の平野は、迎日灣に注ぐ兄江の上流にあり。而して、此平野の水か唯

一とすぢの兄江に流れ込み、兄山弟山の間を通過して迎日灣に入るは、稍々我が奈良平野と大和川とに似たり。

慶州は蔚山灣より北約十里、迎日灣より西南約五里の地にあり。慶州城を中心として約四里の半徑にて描ける圓圈内の水は、(一)西川、(二)牟梁川、(三)蚊川南川に、(四)北川一に東川となり、或は關川となり、其幅各々半里内外の肥沃なる谷を下りて府城の附近に湊合し、西川其主水となり、其幅また半里を出でざる山間の平野を、悠々北に流れ、杜母淵堀淵温之淵など、處々に川名を改め、府城を去る約四里の地點に至り、兄山弟山の峽を出で、兄山浦或は兄江と改稱せられ、こゝに迎日の「デルタ」を作りて海に入る。新羅は實に、今日の府城地近郊を中心として湊合せる兄江の諸支流の諸谷の形恰も海盤車に似たる地より起りしものにして、新羅の中心たりし地は、此海盤車の胸に當る處なり。新羅は此地に起り、其都城を此地より他に移さずして、三韓を統一し、此地にありて滅亡せしなり。此野は東西南北一里内外なれども、豐饒なる谷を足として諸方に出せること前述の如し。これ新羅初期の全疆域なり。其四圍の山甚だ高からず、展望範圍も奈良に及ばざるなり。

慶州の地上述の如きを以て、此地に入る道路の重なるものは五條あり。(一)永川若くば清道の方面より牟梁の谷を下るもの。(二)彦陽の方面より蔚山迎日兩灣の分水嶺を踰へて西川の谷を下るもの。(三)蔚山方面より極めて平坦なる蔚山迎日兩灣の分水界を踰へて南川に沿うて下るもの。(四)東海方面より北川の谷を下るもの。(五)迎日の方面より兄山弟山間

の險峽をすぎて兄江を溯るもの。以上の五條これなり。

(一) 牟梁線。此線は更に二線に岐る。其一は永川を経て安東竹嶺に到るもの、即ち東萊蔚山より慶州永川を経て京城に達する官道と、永川より琴湖江に沿うて下りて大邱に出づるものとなり。其二は慶州より發し永川まで行かずして牟梁の谷より西し慶山に出づるものと清道に出づるものとなり。先年の旅行には此方面は實地に踏査すること能はざりしを以て、之を彼地の人々に質し、また嶺南邑誌の圖、或は大東輿地圖に依るに、慶州より永川への道も清道其他への道もみな峠を起ゆ。此牟梁の方面は、新羅より伽倻百濟若しくは高句麗に對して重要なものにして、高句麗百濟に向て出でし兵は多く此方面より進みしならむ。善德王の時、百濟兵が潜伏し居りしと傳ふる女根谷は牟梁川の上流にありて、金庚信が高麗征伐の途に宿せりと傳ふる骨火館は永川附近にあり。文武王が築きし富山城は此方面に備へたるものにして、永川街道の峠及び清道みちの峠へは此城より嶺つゞきて出兵し得るが如し。彼の百濟の故都に屯せし唐兵が新羅を征伐せしならんには此方面が其衝たりしならむ。尙ほ大東輿地圖によれば慶州の郡界は前記の峠を越へて西にあり。又永川郡内には猪峴里柳等里等慶州郡の飛地あり、此等の地は新羅時代の停即ち陣の地ならんと思はる。

(二) 彦陽線。彦陽線は洛東江下流の地方より梁山に至り、鷲栖山より出て梁山の南を流れ洛東江に入る、黃山江に沿うて上り新羅の古刹にて今尙ほ韓國有數の大寺たる通度寺の前

約半里の地點より右に入り、洛東江と蔚山灣との分水界を踰へて彦陽に到り、彦陽より稍々高き峠即ち蔚山灣と迎日灣との分水嶺を越へて、西川の上流へ出づ。是が故に梁山は新羅にとりては非常に重要な地點にして、洛東の下流地方即ち慶尙道の南海より新羅都城に入る要衝なると同時に、密陽清道方面への要衝あり。梁山は新羅の耽良城、即ち日本紀の草羅城の地なることは、既に先輩の定説あり。三國史記には耽良は文武王が上州下州を割きて置けりと誌せど、有名なる朴堤上が耽良太守なりしとの古傳より推すも、耽良の名は文武王の時に新に作りしものにあらず。但し梁山の名は景德王耽良を收めて良州とし、後に梁州とし、更に梁山と改めしによる。三國史記地理志良州の條に、神文王七年築城周一千二百六十步とあるは、草羅城を修覆せしものなるべし。梁山と彦陽とは慶州の外城とも稱すべき位置にあり。彦陽より慶州に入る間の峠を守れば、敵の侵入を拒ぐことを得べし。眞平王の築さしと傳へらるゝ南山城は、一は都城の民を收容し、一は此方面に備へたるものにして、南山城より嶺つゞきにて此峠道へ出づることを得るなり。現今の彦陽慶州郡界は此峠より遙か西にあるは古制の遺れるものなるか。

(三) 蔚山線。蔚山方面は慶州の南にあれど、三國史記東京雜記等には皆慶州より東とある方面にして、慶州より蔚山まで十餘里、此間何の障害物なく直に達することを得。慶州蔚山間の分水界は、小生旅行の際夕景になりたると、雨天なりしとのために心付かざる間に通過せり。蔚山は良港にして、冬外串の回航に困難なる迎日港よりも遙に優り、二三百石積の日

本帆船にて、九州山陰の方面よりの往來、實に容易なりと聞けり。李朝初期の日本居留地三浦の一なる鹽浦は、海東諸國記にも其圖を載せて其位置明白なるが、今尙ほ其名を存じて蔚山郡内にあり。古代倭人が新羅に貿易交通せしも來寇せしも重に此蔚山方面よりなり尤日本が任那に大勢力ありし時代には蔚山方面も重要な事勿論なり。されば慶州平野に孤立する小丘、狼山の南麓に外寇退治

のため建てられし四天王寺は、蔚山を遙に直望する地點にあり、聖德王も蔚山慶州間に毛伐郡城今毛火にあり、後に説くべしを築きて、日本人の來路を遮ぎりしなり。蔚山は良港なり、而して新羅の

此方面に於ける天然の防備の極めて薄し、中世に於ても此方面に於ける倭寇の侵寇は激甚にして、李朝の初に河崙は惠利院に記して、興地勝覽倭寇爲患者數十年、可悲之甚矣、予於庚午

春將適慶州、道過城南、寄宿天王寺、明日出門、則寺以東杳無人煙、行九十餘里、以至于蔚州、則孤城去海不滿十里、賴有戰艦分泊浦、以備不虞耳」とし。李詹の蔚山古城記には蔚山の知州が賈印

信翠、吏僑寓雞林城云々とあり。これ明に蔚山は倭寇の手に委せられ居りしなり。此方面に於ける倭寇の古來激甚なりし事以て知るべし。

(四) 東州のザアレを下る線。此道路は踏査すること能はず、唯々此地方の人より其地勢を聴き、又は既成の圖に依りて按ぜしにすぎざるが故に、正確なる智識を缺くと雖も、此不充分なる調査によれば、東方は山岳重疊して海に迫り、たとい牟浦甘浦の如き上代の船舶にとりては充分なる碇泊港あるも、陸上の平地甚だ狹隘なるが爲に、何等の設備をも施す能はざるを以て、此等の港は臨時の避難港たるに止まり、軍隊の上陸などには不適當なりしが如し。

尤も此方面より倭寇の入りし記事は、三國史記にもあり、又文武王金法敏が護國の龍となりて蟠居すと傳へらるゝ利見臺の蹟も此方面に存すれど此方面は李朝中宗王七年(1512A)に築かれし甘浦營も間もなく無用なりとて東萊に移されしが如き地勢なるを以て、外敵即ち日本に對して大なる憂とはなかりしが如し。

(五)迎日線。迎日線は迎日灣よりの倭寇と、安康を迂回しての永川方面と、日本海沿岸住民との交渉路なり。此の慶州迎日間の扶助にて兄山弟山の兩山兄江に迫りて絶壁をなして峙ち、險崖の一狹路僅に人馬を通じ、河水深淵をなし、頗る要害の觀あり。尤も兄山の南を迂回して峙を越ゆる間道あり。因に云ふ、兄山の附近には新羅の神武王陵あり、兄山の頂上には王の祠宇あるが故に、此王が扶助の峽を開鑿し、慶州の水を迎日灣に切り落して慶州平野を作れりと、恰も我が甲州平野のそれに類似の說話を生じ、毎歲五月には遠近の士女王祠に參詣すといふ。慶州迎日間は土地高低の差甚だ少なく、現今も慶州以下は河流の潤るゝ如き事なく、扶助にては海上通航の朝鮮船が溯りて碇泊せるを實見せり。然れば山に木多かりしと思はるゝ上代に於ては、水量も多かりしなるべく從て筏を以て迎日灣より慶州に溯ることは容易なりしならむ。河の兩岸は、慶州の北一里餘の地點に於て、金剛山の裏手の山より出でし一支脉の小丘が河に臨めると、彼の扶助の險崖とを除けば、平野なれども現今は殊更らに通路を山によらしめ、吾兒谷峴ウエールケムの如き險峻なる阪道を通過せしめ、平野の水田を濠と同じき働きをなさしむ。これと同様の作路は、牟梁方面にもありときけり。尤も吾兒谷

峴の阪道も、昔時は現今の如く山林荒廢し土砂を流下し山骨を露出するに至らざりしならんが故に、現今よりも險峻ならざりしならむ。此方面を記述する序に、迎日に就て一言せんに、迎日は一に延日とも書す、迎と延と音通なるを以てなり。此の迎と日との二字が、妙に日本人の感情を動かして、此迎日こそ日本と新羅との交渉地なりしと思惟せしむるに至れり。但し迎日は、新羅時代には斤島支縣と稱せしを、景德王臨汀と改め、高麗朝に至りて初めて迎日と改稱せしものなるを以て古名にあらず。また今日の迎日邑は、小生が旅行當時より三十年前に新設せしものにして、三十年前まで、其縣治は兄江の北の高臺地にありしといふ。迎日踏査の際に、此古迎日の地へ太古日本の強き女王上陸せりとの口碑土人の間に存ずと聞き、素より出所怪しと思ひ乍ら、一應の調査を試みしに、此事たる、近年此地へ來住せし日本人が、此地こそ神功皇后の上陸地點なれと斷定して、之を朝鮮土人に語り、此物語は土人間にあること兩三年にして、忽ち古來よりの口碑なるかの如き古色を帯び、之を土人より更に新來の日本人に傳へしものなること明白となりしことあり。一般に朝鮮にありては、有形の物も無形のものも一切のもの忽ち古色を帯ぶる事は研究者の注意すべき一事なり。偕て迎日方面は、蔚山方面に次ぎて守り難かるべし。尤も小生は迎日方面が倭寇の最要衝なりしとは信ぜずと雖、これと同時に此方面より倭寇なかりしといふにあらず。迎日方面もまた倭寇の一衝たりしことは勿論にして、高麗末の李崇仁の新城記興地勝覽に迎日の條に、迎日實海寇往來之衝也、自庚寅始告病焉、歷三十年生聚掃地盡矣とあるにて、中世に於ける此地の倭寇の有

様を知るべく而して之より推して上代もかくありけんと推察さる。小生旅行の當時には迎日附近の浦頂には九州より家屋の木材瓦其他器具一切を舟に積みて移住せる農家四五戸ありて日本帆船の來泊せるものもありき。然れども新城記は沿岸としての迎日の有様にて、此地より倭寇が内地に進入せしにあらず、冬外串を巡りて迎日灣に入るは容易ならず、港としては蔚山に遙か劣ると聞けり。小生は此方面を以て日本軍が慶州に向ひし常路と信ずる事斷じて能はず。北林即論虎藪は地理說上慶州が此方面に於て缺くるを捕ふ厭勝より設けしものなりといふ。此藪即ち森は二里も北方より望見するを得。

之を要するに慶州は迎日蔚山間に亘れる谷にして、西川牟梁川北川の谷は其迫なり。小生は慶州の前述の地勢を師坪井先生の前に申し述べしに、先生は然らば蔚山は慶州の追手にして、迎日は搦手なりと教示を垂れ賜へり。

さて少しく慶州平野の現狀をのべんとす。此平野の地味は豊饒なり。慶州平野の飛地とも稱すべき迎日の低地は驚くべき膏沃なれども、卑濕にして葭葦の叢生地多きが故に須らく之を取り除きて説かざるべし。氣澄みわたる秋晴の日に、金鰲山もしくは金剛山頂より眺望すれば、諸川の谿に稻雲連なりて、矮少なる村屋を包み、山麓の高臺地に溢れ實に樂しき好景なり。葉樹は稀に見しも野生のものを見ること能はず、北韓にて見し如き大木をなすものなかりき。棗梨には野生あり。柿栗は栽培せられて美果あり。

山林は濫伐の結果荒廢を極むと雖も、上代盛時は鬱葱たるものなりしならむ。野花に菫

瀟、ヒオウギ、ナデシコ、オミナメシなどありて旅行者をして何となしに新羅の盛時を忍ばしむ。慶州府城内の水は汚穢甚しく不良なれども郊外の水は奈良ほどに不良ならざるが如し。而して、山に樹木多かりし上代の水は更に良しかりしならむ。金鰲山には水晶を産し、其品質は不良なれども、土人は此山を韓國唯一の水晶產地として誇れり。鐵は比較的多く産すといふ。輿地勝覽所載の八助浦の鐵は實見せざりしも、吾兒谷峴の峠にては層をなして露出せるを見たり。蔚山近傍にては當時採礦しつゝありき。古史に「辰韓の國鐵を出す」云々の文は其眞なることを證して餘りあるが如し。花崗石の良材ありて諸所に之を切り取りし痕跡を存す。また慶州の荒地に散亂せる人工を施せる立派なる花崗石柱は夥しかりき。遺物の條に説かんとする多寶塔といひ、石壁といひ、此地方に石材使用の術が上代より發達せるは、一は其材料の好美豊富なりしにもよるなるべし。地震は二三年間も在留せる日本人も之を感じたることなしと語れり、これまた石造建築物の遺存する一因たるべきなり。

慶州府城につきて一言せん。現今の府城は方四丁ばかりありて郊の西方に偏せり。邑……邑と稱しても人戸二三百の小なる田舎町にすぎず……は南門外最も繁華なり。一般に朝鮮の邑は、若し地勢にして許さんには、必ず南門外が繁華となるが如し。朝鮮の地方の需要供給は市に依る。各地に日を追うて市あり、商人は甲の市場より乙の市場へ市日を追うて營業す。尤も一種の專賣制度ありて、或る商品に限るて常設の店舗を許せりと雖他はみな市によりしを以て、田舎町の發達せるものなし。此國に貨幣が一般に行はれしは十

七世紀の半頃よりなることの一事を以て既に諱しうべきが如く、一體に朝鮮人の衣食住は原始的なり、多數平民の生活は簡單なり、これ以上の簡單はありうべからざるもの多く、今も尙ほ太古を目前に見る心地するものあり。斯くの如き地方人民の生活狀態にありては、田舎町は發達せざるなり。されば慶州も徴々たる田舎町にすぎず。慶州城石壁には、新羅高麗時代の建築物の遺石材を其まゝ使用せしものありて、立派なる花崗石に彫刻を施せるものを混じ、甚しきは佛像を刻せるものあり。此築城のために遺物の破壊湮滅せるものは少ならずりと信ず。府城は彦陽方面を其正門即南門とし、蔚山永川間の官道即ち京城への公路は此南門外を横に通過す。南門は韓國に於ては如何なる地勢にあるも正門なるが如し。府城が郊の西方に偏せるは、一は北川の汎濫して城を衝く恐ありしにもよるべしと雖、其主なる原因は、朝鮮の所謂地理説によりて、皇南里の小丘(實は古墳)及び南山の陰なるを避けしにあらんか。南門より出ずる彦陽街道は鳳凰臺を少しく避け、次に五陵を避けて屈曲すれども朝鮮の道路としては直線に近きものなり。此街道は三尺幅のものにすぎざれどもかゝる小徑の小溝に幅二間長約一間の見事なる石橋類廢して横はるあり。此彦陽街道の北約二町に此街道に平行する一小草徑ありて、此草徑は幅二間の石橋あり。此二道路に沿うて礎石の並列せる廢墟あり。南門外に郊を東西に貫く直路あり(南門の西に當る邊より少しく南に折る)此道路の一部分は蔚山永川間の官線となり、東方林篁寺東に至りて消失す。上述の三路は慶州盛時の面形を示すものにあらざるか。

新羅盛時に於る都市の中心は、芬簋寺月城附近なりしならむ。此間には宏大なる廢墟ありて、古瓦破片最も夥しく其紋様の形式も種々あり。今や慶州郊野は北川の汎濫に其幾分を荒されつゝあり。試に北川の最南岸の新に崩壊せし側面を検すれば、瓦層の横はるを見るなり。由來北川は新羅の盛時より汎濫せしものゝ如し。新羅宣德王が薨ずるや、王族の周元位を承繼すべかりしを此川水漲りて川北に邸ありし彼は京に入ることを得ず、遂に元聖王即位せりとの記事三國史記に見ゆ。月城の南一町ばかり、蚊川に向て平野に切れ目あり、此切れ目は北川が山間より慶州郊野に出づるや西に屈曲せずして直に南川に落ち込みし事ある痕跡なるが如し。土人も北川が南川に落ちしことありとの傳説を有すれどもこれ恐らくは洪水の際一時の事なりしならむか或は月城防禦のために人工を以て北川の一部の水を斯く誘ひ來りし事あるか明ならず。とにかくに、山林の荒廢せる今日、此まゝにして放置せんには、府城も近き將來に川に沈まんとは杞憂にのみ止まらざるべし。輿地勝覽には諸川に橋ありし記事あれども今は一も存せず。

第二、遺物遺蹟

(1) 六部の遺蹟と新羅の稱。

新羅は上述の兄江及其支流のヴァレーより起りし事明なり。半島を奄有するに至りし新羅王國本來の民族は辰韓新盧の人民の後たる者即ち此地に當初よりの土着民族と、此民族を征服し或は其許諾を得て來住せし諸種の民族と、混血せしものならむ。三國史記には

朝鮮の遺民山谷の間に分居して六村を爲せりとし、此六村を以て辰韓六部となし、六部の人神異なる朴赫居世を得、推尊して君長となし、新羅を建てたりとし。三國遺事には新羅は六村即辰韓六部より成り、六部の祖は皆天より降りしものにして、王族は此六部以外の朴、昔、金三氏なりとす。史記と遺事との此記事を比較するに、遺事は史記よりも古風なり。新羅を朝鮮遺民の國とせるは、新羅時代に支那史籍を參考して自國の歴史を編纂するに當り、新羅を全辰韓の興起せるものと認定し、三國志に辰韓は秦の役を避けし亡人の國云々とあるを、更に賢人箕子の建てし朝鮮の遺民の再興せし國と改作し、以て史の體面を粉飾せしなり。

故に三國史記の新羅朝鮮遺民説は朝廷史官の形式的曲筆の痕を傳へ、遺事の六部の祖天降説は新羅人胸底の信仰を傳ふるなり。而して辰韓と新羅とを全く同一とする一事に於ては兩書共に一致す。されば茲に研究を要するは新羅中世に於て、修史の當時に存在せし梁書の所謂「六啄評」を以て建國の當初より存在せるものとし、此六部を直ちに三國志に、秦韓始有六國とある六國と認定し、其結果として新羅と辰韓とを全く合一とするに至りしか、將たこれと反對に預め新羅と辰韓とを全然同一と斷定し、新羅上古の部數を辰韓の國數と同じく六と推定するに至りしかなり。前說穩當にして後説は穿鑿に過ぐ。要するに三國史記三國遺事に記せる新羅建國説は新羅人の純粹なる古傳のみにならずして、三國志を參考せしものなる事の形跡慥かに存ず。小生は新羅中世に六啄評五十二邑ありしといふ梁書の記事を信じ、且つ新羅が數部落の聯合より成立せしものなることを信ぜずれども、中世の六啄

評を直に建國當初の聯合部落の後なりしとし其部數を六とするには尙ほ研究を要すと信ず。亦新羅は辰韓全部の興起せしものにあらずして、其一國の興起せしものなることは、梁書通典等に依るも地理より見るも明白なり。而して新羅人朝鮮遺民説は探るに足らず。三國史に傳ふる秦韓即ち避秦亡人説もまた辰韓人の冒稱に止まり顧るに足らず。抑も自國民の血統を漢民族に繋がんとせしは、東洋諸國に多くありし事なり。高句麗は顯瑣高陽氏の後なりと自稱し。倭人の或者は吳の太伯の後なりといひ。また新羅の王家金氏も少昊金天氏の後と自稱し金庾信の碑には金官金氏も少昊金天の後と誌せること三國史記金庾信傳に見ゆ。新羅末に建てられし朗空大師碑銘には、崔氏を本彼部の後とせずして、周朝の尙父齊國丁公の遠裔とせり。之を後代にしては、高麗王氏を唐肅宗皇帝の後とせんと試むる史官さへ出てたり。上代我國へ漢民族の系圖を持して歸化せる者も、果して漢民族なりや、頗る怪し。(尤も歸化人の中には、自己の祖先を日本の神或は天皇に繋がんとして作成する者ありて、此輩遂には日本新羅上代同域の妄説を出すに至れり。此等の説は日本書紀編纂の當時には卻けられて採用されず、桓武天皇の時には其書を燒却せられたるなり。新羅人に關しては、唐の杜祐の通典に、魏將毋邱儉討高麗破之、奔沃沮、後復歸故國、留者遂爲新羅焉、故其人有華夏高麗百濟之屬と誌せるは注意すべし。小生は新羅を高句麗人の留まりて建てし國とするは未だ一致すること能はずと雖も、其一人に華夏高麗百濟の屬あることを信じ、且つこれに倭人を加ふるものなり。思ふに新羅は、耶蘇紀元二三世紀頃、半島の東海岸

に沿うて南下せる民族が、兄江の水域即ち辰韓の斯盧に入り、此國を成せる數部落の韓民族を征服し、また日本人の一團其他も勝者として此地に入り、是等征服者が貴族となり、被征服者が庶民となり、而して其周圍よりの壓迫が強大なりしたため、却て上下の輯和を來たして、強固となる一國となりしならむ、新羅最古式の墳墓は一種異様の積石塚なること後に述べし。新羅は日本人の建てたる國といふべからざること、勿論なり。

新羅建國當初の庶民が六部より成るとする六の數には尙ほ研究を要すること既述の如しと雖も六といふ數はしばらく措きて或る數の部より成りし事は正確なりと信ず。而して其數は之を地形より推して、六もしくはこれに近きものなりしならむ。此部民は被征服者たる在來の土民、即ち辰韓種と解すべきものゝ如し。此各部は各の谷に別れて部落を作り居りしならむ。既に述べし如く三國史記三國遺事は之を六部とし其六村を擧げたり。

即ち(一)關川楊山村。(二)突山高墟村。(三)茂山大樹村。(四)皆山珍支村。(五)金山加利村。(六)明

活山高耶村なりとす。

(燃藜室記述別集歷代典故には杜耶祐等六村是謂辰韓六部後分爲十國)と誌せり今通典を見るに此文なし稻葉吉氏良通典を傳ふるにや政宋板通典は現今

通典と相違する點多しといふ。或は朝鮮にかゝる良通典を傳ふるにや政宋板通典は現今なり。此六部は即新羅中世の六隊評なり。これを遺事によりて調査するに、(一)は其後に李姓

となるものにして、南山城下邊の地、府南半里より一里の地を中心とし西川の谷にあり。(二)は鄭姓となるものにして、蔚山の方面に、府城を去る三四里、南川の谷にあり。(三)は孫姓となるものにして、牟梁川の谷。(四)は崔姓となるものにて、府南一里位の處、南川の邊にあり。(五)

は裴姓となるものにして、北川の谷にありて、海岸まで亘りしもの。(六)は薛姓となるものにして、迎日方面にありしなり。今日の慶州は新羅の盛時の光景全く消へて、所謂辰韓斯盧時代の寂莫に復歸し、而して現今よりも以上の簡單なる生活は、社會を作る人類の爲しうべからざるものなるが故に、人民の生活狀態は、上古と甚しき差なきが如し。されば、慶州の市日に、南山に登りて前記の諸谷より人々が市に來り家に歸る様を眺むれば、實に身は太古辰韓の部落聯合時代にあるが如き感あり、此時の感興は忘るゝ能はず。然り而して茲に最も注意すべきは、六部の各に附せし姓の事なり。三國史記三國遺事共に、儒理尼師今の九年に六部の名を改めて、且つ各に姓を附せりとすれど、兩書共に、上代の新羅人を傳するには、何部の人といふ語を用ひ、王族の外は姓を附すること稀なり。新羅王が各部に姓を賜はりしは、國人が姓なきを蠻夷の俗として恥づるに至りし時代のことなるべし。而して此時の各部は、既に血屬團たる性質を失し、部曲もしくば今日の面の如く、地域の稱と變じ居りしものにあらざるか、更に研究を要するなり。王族貴族は三別あり。これを朴氏、昔氏、金氏とす。皆外來の者にして、征服者なり。而して此貴族と平民とは頗る能く調和せり。其政治も君主專制ならざりし事は、宮崎博士之を「阿利那禮河と新羅の議會」と題せる論文にて説かれたり。王家が一家にあらずして、三姓の中の有力者が立ちし如きは、實に一種特別の政體にして、研究に非常に興味あるものなり。〔新唐書新羅傳には「民無氏有名」とあり。〕

此兄江の水域の地は、新羅王朝の滅亡に至るまで其上に如何に政治上の變動がありしに

もせよ、新羅即徐羅伐或は徐耶伐、もしくは徐那伐の名を以て呼ばれたり。これ地理的名稱にして支那流の國號ならざりしなり。

始林、鷄林ともに全一地名を字を異して表はせしのみ。鷄字にチ、ジ、キ等の漢音ありて、鷄林と書くも始林と書くも全一音なりしことは、白鳥博士既に十數年前「朝鮮古代國名考」にて教示したまへり。刊本高麗史には鷄林を時に雞林に作れり、これ鷄と雞と音の通ぜし一證なり。(國書刊行會本が之を誤謬の最も甚しきものとして鷄に改めしは謬りなり)。此始林の林も、鷄林の林も此文字を書きし當初は、其音リン習と讀まずして、其訓スブル今置の方を探りて、始林雞林共に「シスブル」リ今置と發音したりしなるべし。今は附音なるのみ。二字の地名の上字を音にて、下字を訓にて發音する例は、火(訓護)の字を附せし場合常にこれなり。然れども小生の韓語の智識は皆無に近し、故に説を定むる能はず、讀者諸氏に教示を請うものなり。

此地は新羅王國滅亡後は邑名を徐羅と稱し、更に安東都護府となり、邑號を慶州と稱するに至れり、又地理説より高麗四京の一として東京と稱せられ。穆宗王十二年より佛國寺古歷代記古注のよ、或る間樂浪郡と稱せられたる事あり。

(1) 鷄林。

鷄林は月城の西にある小なる森にして、金氏の祖金闕智が降臨せし森とて有名なり。新羅と同じ意味の鷄林或は始林は、其狹き意義に於ては此林を指すなり。一般に此の林の名より出て、雞林及始林が新羅の別稱となれりと説けども、予はこれに反して、雞林始林は雞字始字林字等のために、國名より時々此の森を指すにも用ひらるゝに至りしものと信ず。

とにかく、現今雞林と稱する林は、新羅建國當時よりの神聖林なるべし。現今韓國の各部落には一本づゝの大木あり、特別の崇敬をはらはるゝものゝ如し。たとい此木と此林と現今に於て其意義を異にするものありとするも、原始に溯れば全一の性質のものなりしならむ。雞林は A. Mickiewicz's 'Les Slaves' に誌せるスラヴの「スロボダ」の「ロック」様のものなるべし。

(3) 月城、附金城、滿月城、明治城。

月城の遺蹟は、南川の北に沿ひて、東西凡そ數町、南北二三町の半月形をなし、南山に對せり。此城の地形は、西南方に低下せる丘陵の上土を削平し、附近の地よりも六七尺高き臺地とし、斯く削平して得たる土を以て、川に沿はざる方面に弧形の土壘を築きしものなり。其南方即ち河に面せる方面…半月の弦に當れる方面…は其西南隅の一部、地面低下して水害の憂あるべき部分に堤防様の壘あるのみ。壘は高低一樣ならず、甚しく毀損せられし形跡あり。其高き部分は内方よりは廿尺内外あり、外方よりは廿五六尺以上もあらんと目測されたり。東方最も完全に残り、此方面の壘上には、丸石を三重に布き、且つ壘に沿うて外方に濠ありし跡あり。彼の河沿ひの土壘の一部は、土人が粘土を採るために破壊し居りしかば、就て調査せしに、其内底部の土中に、我邦にて最も古式なりと認められ居るものと全形式の古瓦破片、及び祝部土器破片の混ずるを見たり。河沿ひの地も河中に没入せし跡無し。此城内は、蚊川を距て、對する南方の南山に少しく登れば、其全體を見下され何等の秘密を設くること

能はず。此月城と全く全形式のものは、大邱の達城即ち現今の達城公園なり。達城は高麗朝末に此地の豪族徐氏の一門一統の邸宅地なりしを、李朝の世宗王が收公せるものにして其後郷校など此内に建築されし事あり。此達城の形は殆んど圓形なり。即ち丘の上部を削平して高臺地とし、其土を以て周圍に壘を作りしなり。慶州の滿月城もこれと全形式なりしならむ。月城達城の形式は、朝鮮に於ける最も古き城の形式なるべし。此月城金城等は宮城なりしや邑城なりしやは考慮を要する問題なるが、思うに當初は市場保護の邑城にして王宮も其中にありしを、國家の強大となるに従て、王宮とのみなりしならむ。月城の内は今ほ畑として耕さる。而して古瓦の散亂すること、他に比して僅少なり。人工を加へたる石材の好良なる物數個發掘され、一小陋屋の傍らに積みあるを見たり。

三國史記地理誌に、赫居世二十一年築宮城號金城婆娑王二十二年於金城東南築城號月城或號在城周一千二十三步新月城北在滿月城周一千八百三十八步云々とありて、月城に相並ぶべき金城滿月城は、輿地勝覽東京誌を初めとして、近年の編纂書たる嶺南邑志嶠省勝覽に至るまでみな其位置を記し、其周を記すと雖も、兩城共に其遺蹟全く湮滅せり。之を彼地の古老に質すに、一人として知るものなく、李夏集氏の如きは、世代浸遠不知何時入於田畝乎とて其遺趾の存せざるを斷言せり。苦心して搜索せしもうる處なく、或は皇甫里に於ける古墳の周圍にある堤様のものを滿月城の殘壘に擬して調査せしも得るものなかりき。之を諸書の記事によりて推すに、金城は始林の南方より郷校附近にありしが如し。朝鮮の地圖

邑誌等は、既に湮滅せるものをも、前代の書に記載しあるものは、其儘轉載するを以て、之に依りて其存否を論ずべからざるなり。明活城は時日なくして調査に着手する事すら能はざりき。

(4) 南山城

雲峯寺嶺より東に出て彦陽慶州間の峠となり、更に南北に延びて、蔚山慶州に亘れる一嶺は慶州郊野の正面に最も高くして險峻なる金鰲山を聳えしめ、此金鰲山は所謂馬の脊を以て支峯を北方に出せり。此支峯は即ち南山なり。輿地勝覽等には、金鰲山と南山とを全一の山とすれども、今彼地にて聽きし事と、記述の便宜上とより、須らく別のものとして述べんとす。南山城は此南山の中腹を巻きて石壁をめぐらして作れるものなり。此石壁を輿地勝覽には周七千五百四十四尺とし、三國史記には二千八百四步、東京誌には二千五十四步とせり。小生は其長を實測すること能はざりしも、初めは其南山城壁たる事を知らず、或は傳へ聞きし神籠石様のものにやと思ひ、其蹟を追うて遂に一週せしに、甚だ疲勞を感じ、諸書の記事よりも遙かに長きかの如き感ありき。此城は三國史記には新羅眞平王十三年辛亥に築けりとすれど、其以前より何等かの設備はありしを、此時に増築せしものならむか。然れどもこれ唯推測のみ。此南山城は寇に備ふる山城にして、城壁は數個の小峯を包擁して山腹を紆行し、壁の高さ凡そ九尺にして、石の自然面を巧に使用し、切り石の如く積み。東方即蔚山方面には、山麓より高き地點にあれど、西方彦陽方面にては、著しく低下し、麓に近き地

點に達す。現今甚しく崩壊して、殊に西方の如きは最も甚しきが故に、精密に觀察せざれば、其遺蹟認知し難き部分あり。(又南山と金鷲山と連絡せる馬の脊に當りて、極めて重要なべき部分に、近年墳墓を築きたるものありて、城の石壁を崩し、之を墳墓の周圍に積みて、著しく石壁を變形せしめたるものあり。南山は矮少なる野草さへ根を絶ちし處多くして、全山禿せるを以て、雨毎に土砂の流下甚しく、此流下せし土砂は先づ城壁の内側を全く埋め、更に壁を越へて流下せり。此城内には、宏大なる建築物ありしものゝ如く、古瓦の破片夥しく土砂と共に石壁の附近に流下散亂し、或は土中に埋もれ居れり。之を其紋様と形式とにより推定すれば、上は我が所謂推古式の如き最古の式より、下は高麗朝末李朝初期に至るかの如き感を起さしむる形式に至るまで、種々のものあり。城内には上代土器の完全なるもの地下一二尺に埋没し、又其破片の夥しく散亂すること實に驚くべきものあり。小生は學術參考品として、古瓦數個、完全なる土器數個、價值を有する土器破片一括、佛像の破片等を採集し携へ歸れり。

思うに富山城も此城と同形式ならむ。此城は三國史記によれば、文武王三年正月に築かれたるものにして、同地理志には之を未詳地方に入れたり。輿地勝覽東京誌みな之を府西三十二里にありと詳記し、大東輿地圖嶺南邑志圖みな記入せり。三國史記編者金富軾は慶州の人なり、何故に之を知らざりしか。小生は此城を實地調査すること能はざりき。

(5) 關門城

關門城につきては、三國史記卷八新羅聖德王廿一年の條に、築毛伐郡以遮日本賊路とし、三國遺事にも、開元十年壬戌十月始築關門於毛火郡、今毛火村屬慶州東南境、乃防日本塞垣也、周廻六千七百九十二步五尺、役徒二万九千二百六十二人云々とあり。毛火村は今尙ほ存在し、慶州蔚山間の分水界邊の西方にあり。現今も石築の石壁のあと山腹にあり、土人は之を萬里城と稱し、石壁は南山城に類すといふ。小生は旅行の際、雨天にして且つ夕暮となりしため、馬上にありて心付かざる間に此分水界を経過し、踏査は勿論觀望することも能はざりしかど、其地勢と位置とは粗ぼ知る事を得たり。勝覽も東京誌も此城を府東四十五里にありとせるため、府東の語に迷ひて、其位置を確定し得ざりしも、實地調査の結果、蔚山方面は慶州の東面に屬するが故に、此方面はたとひ其實慶州の南にあるも、盡く東と記せらるゝ事を知れり。これと同じく、迎日方面は其實東にある地もみな北とするさるゝなり。關門城は、大東輿地圖によれば、分水界より稍々南に下りて、語連川の上流に、敵仰ぎて我に向ひ、我れ俯して之に接するの地勢にあり。此城の地勢と其目的と遺事にある關門、塞垣の語とによりて推考するに、此城の構造は、李朝が北方人の來寇を遮ぎるために築きし車輦館の城と同じなるべし。即ち道路を挟みて左右の山の對峙する地點に、堅固なる壁即ち塞垣を横へて關門を設け、此塞垣の兩端は高く左右を山の中腹に達せしめ、此左右の山に山城を設けて、其城壁と此塞垣とを連ね、之を擁護するなり。新羅にては、此城築かれてより倭寇止みしと傳ふるも、其築かれしは我が奈良朝なるを以て、倭寇の止みしは、其因我國に存して、彼れの警備に關

係なし。

(6) 四天王寺。附望德寺。

四天王寺は狼山の南麓遙かに蔚山灣を望む高臺地にありて、文武王が外寇熄滅のために建てし大寺なり。河崙の恵利院記によれば李朝の初期には尙ほ存じたるも、今は湮滅せり。日本に於て貞觀九年「新羅警備之謀」として伯耆、出雲、石見、隱岐、長門に四天王寺の建てられし事と對比して甚だ興あり。

四王寺と前後して建てられし望德寺墟は四天王寺の西南田圃中にあり。こゝより優美なる寶相華の紋様ある磚と十數個の古瓦とを得たり。今文科大學に藏せらる。

(7) 古墳。附金庚甕墓、掛陵、文武王陵。

慶州に於て最も多く存する遺物は墳墓なり。墳墓は國法と鬼神に對する恐怖とが之を發掘破壊せしめざりしを以て、慶州附近には、新羅時代より高麗時代を経て現代に至るまでの古墳新墓相錯雜して遺存し、西岳里の山腹の如きは山形を變ずるに至らしめたる場所あり。新羅古墳につきては特に一報告文を作らんとする考あり、其一半は人類學會雜誌第二百六十九號に掲げたれば、こゝには極めて簡単に述べんとす。古墳には地理說の影響を受けるものと受けざるものとあり、即低濕の地にあるものと高地にあるものとあり。便宜上是等の陵墓古墳を大中小の三形に區別し、大形は高五六十尺より三十尺内外に下るものとし、中形を三十尺内外より十五尺内外、小形を其以下とせんに、中形以上のものは、新羅時代の

のものにして、小形のもものは李朝のもの多からむ。上代の小形のもものは其主流失して跡を留めざるべし。且つ李朝に至りては士民の塚墓に制限あり、また高麗及び李朝の王陵に大形のものなし、而して形式的禮義の喧しき此國に於て、士民の墳墓に王陵より大なるものあるべからざるを以て、中形以上のものを新羅時代のものとして推定して誤りなしと信ず。大形のもものは多く低濕の地にありて、皇南里に群集し。尙ほ府城を去る西二里半、梁方面の金尺洞にも群集せりといふ。群集古墳の排列は西岳里に於ける太宗王陵を除けば一定の規則なく無意味に集合せるにすぎず。古墳の形狀は圓形にして、稀に雙圓形のものあり。一個隋圓の物ありしが、方形もしくは瓢形のものなく、また濠をめぐらせる痕跡なきのみならず、密集する状態より推せば、濠なかりし事明なり。埴輪を建てし跡方も勿論なし。最も古式なるべき大形のもものは、其内部に石槨なく、積石を以て棺を擁護せるが如く、彼の懽齊叢話に野人の俗を記して、其葬人も穿穴而投尸於中、累石爲墳とあるものに似て、ケルンの一類なるが如し。此ケルンは小生昨年萩野博士に隨行し平壤都墓洞に於て石槨ある高句麗古墳群集する中に一個あるを見たり。我邦にも往々發見す。或る民族にては非命の死を遂げしもの、墳墓は、其魂魄の迷ひ出づるを封ずるが爲めに特に之をケルンにする習慣ありし由なれど、慶州のものは決して一個の特別なる形式にあらずして、上代大形のものに通ずる一般の形式なり。而して此一般形式は特に新羅上代のものに限るが如し、金海首露王陵は低濕の地にありて大形なる事慶州皇南里のものに外形酷似すと雖も、芝峯類説には、壬辰年

後倭發金海首露王墓、壙中甚濶。頭骨大如銅盤。手足脛骨亦甚偉、樞傍有二女面貌如生、年可二十、出置壙外、即消滅、蓋殉葬者也。」とあり。此記事は其まゝ事實として直ちに採る能はざれども、壙のありし事は信ずべし。小生は金海に於て數個の荒廢類損せる古墳を見しもケルンは無かりき。中形のもの、即土人が高麗葬と稱するものには、石槨あり石棺なし。槨の形は長方形のものあり、方形のものあり、方形を普通とす。日本の古墳の槨とは構造の手法全く異にして、寧ろ高句麗のものに近し。尤も我國にも慶州古墳に稍類似する石槨を有するもの極めて稀になきにあらず。大野氏によりて世に知られたる和歌山縣海草郡和佐村宇岩橋の一古墳の如きこれなりと雖之れ他に類なき特別のものなりとす

人類學會雜誌 第二百五十九號 小

生は大形のもの一個と、中形のもの數個とを調査せり。

此中形のものゝ内二個は外形より見れば原形のまゝの如かりしが、其一個は既に發掘され、内部攪亂され居りて、研究の目的を達する能はず。他の一個には十三個の土器あるを發見せりと雖も研究者としては頗る恥づべき不注意のため、其配置人骨の有無につきては、之を知ることを得ざりき。古墳は近年韓國政府の政令案弛の結果として、予旅行の當時は盜掘頻りに行はれ、其發掘品は盡く日本商人の手に歸し居りしを以て、古墳内遺品は釜山に於て、大邱に於て、比較的精しく知ることを得しが、之を日本古墳よりの發見品に比すれば、新羅のものは日本のものに比して土器の外は甚だ貧なるものゝみ。發見品は殆んど土器のみ而して土器は日本のそれに比して概して優れたる作なり。此支那文化を傳へざる以前よ

り、其製造の技術を有したりと思惟せらるゝ土器は時代の遷移に伴うて、其形式に變遷あり、新羅上代のもののほど日本上代のものと類似し、時代の降るに従ひ、相違を生じ、新羅のものは著しく高句麗のものに類似の度を益すが如し。此事は後に更に説くべし。小生は慶州古墳内遺物としては土器の外は、採集することも買収することも得ざりしかど、近日慶州にて古墳内より發見せりと云ふ環刀と銼とを見しが、鐵製にして一も裝飾なく、日本古墳内發見品に比して甚だ劣れり。金環も慶尙道にて京釜鐵道線工事中發掘せるものありしも、慶州に於ては發見せられず。鏡は北韓にても南韓にても發見さるゝも、慶州に於て發見されしや否や未だ知らず。小生の旅行當時は古墳の盜掘未だ盛ならざりしも、其後開城附近に於ける高麗時代墳墓盜掘の大流行につれて、慶州にても盛んに發掘せられ、小生は昨年大邱にて此等發掘品の古物商の手に積聚するを見しが、二三鐵器の外は土器ありしのみにて、高句麗方面及び我が國にて見る如き鍍金の立派なる品無かりき。殊に曲玉管玉は絶無なり。從來朝鮮にて曲玉を發見せしこと三回、五個あるも皆、金海附近に於てのみ發見されしが如し。思うに上古の日本人の遺物なるべし。

東京人類學會雜誌第二百六十四號所收の拙稿「朝鮮にて發見せる曲玉及金環等」に、此事を論じ置けり。

此事は故神田男爵が既に明治二十一年人類學會雜誌第二十六號に論じ居らるゝ事近頃に至りて發見せり。

慶州に於ける新羅古墳の内、有名なるは金庚信墓と太宗王陵及び掛陵なりとす。

金庚信の墓は西岳里松花山にあり、三國遺事に陵在西山毛只寺之北東向走峯とあるものこれなり。此處より前方の丘陵を見越して慶州平野の一部を眺望し、一方は容姿秀麗なる

仙桃に對し、位置風光共に優ぐれて、國家元勳の墓として申分なき地點に築かる。墓の大きは中形にして、周圍百七十尺ばかりあり。其裾を包擁するに、各高四尺長七尺ばかりにして、陵の圓形に沿うがために少しく弧形をなせる板石二十四枚を以てし、各石板の合せ目に當る處には更に板形の石柱を立て、これを締め、堅牢にすると共に美觀を添へたり。此二十四枚の石柱には一枚づゝを距て、之を方位に合せて、十二神將の各一體を彫刻せり。此板石は築墓當初より存ぜしものなるか、或は後世に添作せしものなるか、今俄に決し難しと思ふに新羅盛時の作なるべく、古雅にして遒勁なるものなり。海東金石苑も之を收載せり。尙ほ陵を去る約一間の周圍に石の瑞籬ありしも今壞倒せり。朝鮮の金海金氏は其系圖を金庾信につなぐを以て、此墓は古來朝鮮の大姓たる金氏の尊崇を受け、加ふるに新羅時代は勿論、麗朝に至りても、殊別の尊敬を受け居りしを以て傳を失せず。金庾信の墓にあらざる如き掛念なし。慥に金庾信の墓なり。三國史記編纂の當時には碑の存せし事明なれども、輿地勝覽には何等の記載なく、唯其收むる徐居正の詩に金老墳前石獸危の句あるより見れば、當時は現今存在せざる石獸の存在せしやに思はるれど、詩人は唯佳句を探り成句を用ふるが故に、實景なりや否や。仁祖王の時、慶州の儒者鄭克俊が著はせる西岳志に、此墓を誌して、墓之石物視王陵有加、而獨龜龍不在、薛因所撰碑文亦不傳とあり。然るに既に淺見法學士が朝鮮第三十二號に、二千年來の金石遺文と題せるものゝ中に誌されし如く、正宗王朝に太提學たりし洪良浩の耳溪集には題金角干墓碑の一文あり、曰く、金角干諱庾信、新羅統合三韓

之元勳也、墓在慶州西十里、余嘗爲府尹、撰文以祭之、見大塚如王者之葬、而獨無一片石在前、爲之徘徊悽愴、後二十餘年、余直騎省、郎官李君書九博雅好古之士也、自言其家在東方金石帖散帙只餘數卷、亟令取來、閱新羅古墳有金角干碑數幅、剝泐微可十而考其文無疑、遂請於李君得其一幅附粧於鑿藏碑之下、耳溪集卷十六とあり。即ち碑の搨本存ぜしなり。耳溪其文を誌さず惜いかな。

掛陵は慶州を去る三里、蔚山方面にあり。其制金庾信の墓と全然同一にして、神將彫刻の手法亦同一なり。金氏のものよりも比較的に能く保存せらる。石獅四、石人二あり。獅の狀貌甚だ雄偉にして、芬萱寺のものに勝れり。此陵は神聖として畏敬せられ、慶州在留の當時も或る者此陵域内に偷葬し其崇を受けしとの風説を耳にせり。

太宗王陵に就きては、關野先生既に其報告書に詳述されたり。今其碑を失すれども、輿地勝覽に收むる燕山の時の曹偉の詩に、斷碣臥荒草昂然見龜首、摩挲讀碑文缺落難實究の語あるより見れば、當時碑身は荒草中に顛倒して存在せしか、或は前に云へる如く、詩人の詩句なるを以て證となすに足らざるか。尙ほ此陵にも金庾信墓の如き石物ありしならむ、今湮滅す。金正喜は太宗王陵上の四陵を眞與眞智文聖憲安四王陵と考證せり。

(8) 其他の遺蹟遺物。

鳴厂池、臨海殿。鳴雁池は圖に示す如く稍高燥なる地にありて眺望佳なり。現今は貯水池となりて遺存し廢頽を極むと雖、嘗て修補せし事もありしなるべく今尙ほ庭園の面影を

存じ文武王時代の宮殿の位置を確定するに必要なる遺蹟地なり。池の西は地更に三尺計り高し。此處に臨海殿基礎存ぜし由輿地勝覽東京誌に記すれども、一應眺めしのみにては一も發見すること能はざりき。

楡橋、瑤石宮、日精橋址。(?)

始林東方の小徑を南に行かば、幅二間半長三間餘の驚くべき石橋の三四枚の石を以て構成され小溝上に架せらるゝあり、是即ち楡橋なり。此附近にあるべき瑤石宮址は今此地方の豪家の邸地となりて其蹟を残さず。此小徑を南に進み蚊川の岸に出づれば、蚊川の兩岸と川中に橋基あり。風詠亭と稱する建築物此北岸の橋基を利用して其上に建てらる。是れ恐くば日精橋址ならんか。蚊川は南川の別名なり蚊は毛火の毛と通ず。源を毛火に發す。

楊山、蘿井、寺墟。此日精橋址ならんか思ふゝ處を渡り、南山の支脉たる丘陵に沿うて南行せば、楊山の邊に出づ。楊山高墟村長が朴赫居世を拾ひしと傳ふる蘿井あり。

これより西行すれば、南山が西麓に寺墟あり、地高燥にして、西川を距て、仙桃山に對し、眺望よろしき地點にありて、三段の臺地より成る。下段の臺地には、基石二尺六寸角の石に直徑二尺一寸の凸出せる柱刻す十餘個と、雙龜の形各龜長四尺余をなす碑跗あり、此龜を太宗武烈王陵前のものに比するに、精巧の度に於ては大に劣ると雖少しく雅致あり。第二段の臺地は、第一段よりも六尺高くまた基石十餘個あり。第三段の地は、第二段の地よりも九尺高し、此處に巨大なる石塔の顛倒せるあり。其塔身の一石は高四尺六寸幅五尺五寸あり。其近傍の草中に方五尺の石板に

天人を陽刻せしもの二枚ありしが、塔附屬のものなるべし。此遺蹟地の地中には古瓦破片夥しかりしも時代を推定するに足る紋様あるものは一枚も發見する事能はざりき。小生は此遺蹟を朝鮮人に鮑石亭墟なりと欺かれて、大誤謬に陥らんとせす。

石塔。石塔の優秀なる形をなせる屋蓋蓮瓣ある坐石等は郊野の到處に散亂せしを以て一々記述すること能はずと雖、今高さ廿尺内外に達すべき多寶塔或は石塔にして、寺院にあるものを除き、荒野の裡に存立或は顛倒せるものを舉ぐれば次の如し。(一)慶州の西北一里迎日街道と西川を距てなる山麓羅原里と稱する地存立にするもの。(二)南山西麓の寺墟に顛倒せるもの。(三)狼山東麓に存立せるもの。(四)芬蘆寺よりは南七八町にして月城よりは東北六七町の地點に田中壞倒せるもの。(五)芬蘆寺東南約三町の地點に壞倒せるもの。(六)佛國寺を去る北へ六七町の山麓に傾立せるもの。(七)南山東北麓に壞倒せる小形のもの、此傍らに石佛の立像あり。以上は其重なるものなり。

玉笛。萬波息笛と稱し、新羅時代より傳來の寶物とす、斯く古代より傳來せるものは朝鮮全體に於て唯此一品のみなるべし。雌雄あり。余が旅行の當時は郡守監督の下に妓生の教長之を保管し居れり。實に朝鮮第一の珍寶たるべし。亂暴なる蒙古人すら之を新羅の故都に遺存せしめたり。形狀等關野博士の報告に詳なるを以て略す。尙ほ金海にも所傳の玉笛ありし事金正喜の阮堂集に見ゆれども今存せざるべし。

芬蘆寺和諍國碑。烏金石に刻すと傳へられ、輿地勝覽及び東京誌に載せて有名なれど、今や紛失し之を窮搜せしも發見すること能はず、唯芬蘆寺北の畑中に、長六尺幅三尺餘高二尺

一寸の碑跗に長三尺三寸幅六寸五分の碑坐を刻せるもの横に倒れたるものを見出せしにこれに此和諍國師碑跗也金正喜と刻しありき。

新羅時代諸寺。現今其遺址は全く湮滅せしも記録によりて其位置を定めうる諸寺は、疊嚴寺永敬寺皇龍寺四天王寺南山寺等なり。此外に寺墟と思はるゝものにして其名の不明のもの十數ヶ所ありき。

此他五陵、芬蓋寺、柏栗寺、佛國寺、瞻星臺、秦德寺鐘、其他は關野博士既に韓國建築調査報告に詳述せられたればこゝには之を略すべし。瞻星臺に就ては和田理學士の詳細なる調査報告文、朝鮮總督府觀測所學術報告第一冊にあり

古瓦。古瓦破片の散亂せる事頗る夥し。芬蓋寺月城間最も多し。疏瓦、華瓦、蚩吻、紋様ある磚の破片百餘個を採集せり。其形式より推せば新羅時代より近時までのものなり。これはまた稿を改めて説くべくこゝには之を略せんとす

(8) 山上發見の古土器

南山、北山、金剛山、狼山の山頂には上代より中世に至るまでの土器夥しく埋没せり。而して完全なる者少からず。火葬の流行時代に遺灰を葬りしものか、或は胞衣を埋せしものかとも思はれしかど、或は盃あり小口の壺あるを以て考ふればそれにもあらざるが如し。此等山頂より發掘せし土器の完全なるもの廿餘個及び破片を採集し歸れり。

第三 結論

結論として遺物遺蹟より見し新羅盛時の都城の有様と其上代の文化とを論ぜんとす。

新羅都城は之を遺物遺蹟の散布より推すに、東は狼山附近に、西は西川に、南は五陵の南方に北は北川を超へて金剛山下に達せしが如し、東西南北共に一里内外なり。芬蘿寺附近より鴨雁池邊に至り、始林月城間をすぎ、楡橋を渡り、日精橋（？）をすぎ、南山の西麓に達する大通ありしならむ。今南門外より芬蘿寺に到る直路は、都城時代の遺蹟ならんか。

彦陽街道、及其西にこれと平行する一徑は、此間の遺趾の基石の配列より推すに、又都城時代の街路の遺りならむ。宏大美麗なる基石の無數に散亂せると、瓦片の遺殘甚夥しきとは、三國史記憲康王六年の條に、京都民屋相屬歌吹連聲、民覆屋以瓦云々とある光景を想起せしむ。其寺墟の夥しきは、此都城が如何に佛法の都なりしかを知るに足る。而して此地の日本との關係は既に論じたところなり。其遺物遺蹟の豊富なるより論ずれば、新羅の故都慶州は高句麗の故都平壤、百濟の故都扶余此地は小生の未だ見ざる地なるに優ること甚だ大なりと雖之を以て、三國時代、新羅が三國中最高なる文化を有せりと斷づれば大なる誤謬なり。慶州に現存する遺物遺蹟は、多く三韓統一以後の物にして、其以前のものは甚だ僅少なりとす。而して此僅少なる統一以前の物も、新羅の國家永く存續し、平和的禮讓の形式を以て、國を麗朝に納れしが故に能く遺存せしなり。若し新羅にして、他の二國と前後して唐に滅ぼされしとすれば、今日慶州に於ける新羅時代遺物は、平壤に於ける高句麗扶餘に於ける百濟の遺物と數に於ても富に於ても差なかるべし。慶州に於ける新羅遺物遺蹟中、隋唐文化の影響を受けざる以前のものは、唯皇南里金尺洞の累々たる古墳と月城とあるのみ。三

國の文化を論ずるには、順序上狹義の三韓の文化より説かざるべからず。三韓諸國が半島に於ける漢民族の移住せし樂浪郡の影響を多少受けしことは争ふべからざる事實なり。漢民族が製作せる工藝品の一二は彼等に輸入されしなるべし。然れども此事實を以て直に文化を傳へしと解すべからず。而して漢民族に影響されし事の比較的多きは後に高句麗百濟の領土となりし地方の民にして、新羅の故地の如き遠き山中の一地は、極めて少なりしこと勿論なり。半島に三國の興起せしは、漢民族衰頹して半島より今の盛京省に亘りし四郡の治敗れ、遂に北方民族の活躍南進を得るに至りしに因す。三國が半島に興起を初めし頃の樂浪は極めて衰頹せるものなり。此樂浪の滅亡を以て、其滅亡の前後學者藝術家が難を同種同教の諸國に避け、其地の文化を進めたる、ギリシア帝國の滅亡に比すべきにあらず。樂浪は支那の一枝葉なり。其民は還歸すべき大故郷あり。何ぞ難を敵國に避けむ。またたとい樂浪の漢人にして、其滅亡と共に四方に散亂せしとするも、無智の支那邊民が、其新住地に自國の文化を扶植しうべきにあらず。高句麗百濟の建てし扶餘民族は、半島に南下する以前より、支那方面と交通して、相當の開化を有せり。新羅は開化せざる民族の上へ、また支那文化を有すること少なかりし北方民族及び倭人等が來て興せし國にして、高句麗百濟は比較的開化せる民族の上へ既に此れよりも高く開化せる民族の來て建てし國なり。而して三國が、半島に現はるゝに前後し樂浪滅びたり。三國の文化と樂浪文化とは交渉なし。三國の文化は、其原住地より携來せる支那文化と、建國後に輸入せるそれとなり。され

ば三國の文化を比較するに當り、假りに建國の當初に於て甚しき差異なかりしとし、唯に其輸入の量にのみ依りて論ずるも、新羅の文化は三國中最も後れたるものなり。高句麗は之を支那史籍に按ずるに既に耶蘇紀元第一世紀より支那と交通し、其後頗る頻繁なる交渉ありき、これ地勢よりして當然と云ふべし。百濟は四世紀半頃より支那と國際交通を始めたれど、其位置より推せば、私商の交通は尙ほ早くよりありしならむ。新羅に至ては、其地漢民族の地に接せず、また或る時期に至るまで、海路交通の途もなかりしを以て、久しき後に至るまで、僅に倭人高句麗百濟の手を経て、支那文物を享くることありしのみ。新羅の名は、陳壽三國志東夷傳辰韓の國中に斯盧の名を舉ぐるを、支那史籍に見へたる初めとす。此國と支那方面との交通を考ふるに、資治通鑑晉烈宗紀太元二年(374 A.D.)の條に「春新羅入貢于秦」とあるを交通の最初の記事とす。次で太元五年にも「秦洛徵兵于新羅」とあり。杜祐の通典には「苻堅時其王樓寒遣使衛頭朝貢云々」とし、三國史記は之を「奈勿王二十六年の條に轉載す。此記事は晉書載記及通鑑になし」此等の記事には、支那史官の修飾もあらむ、が之を事實とするも、其實は高句麗使節が忠義振りを表はすがために、新羅使節或は新羅使節と稱するものを伴隨して、入秦せしめてに止まらむ、或は徵兵の宣言文に當時知れる限りの國名を列擧して、誇張の辭を敢てせしを、史官が其まゝ收録せしものならむ。此時の新羅は高句麗若しくは百濟を経由せずば支那に通ずべき路なかりしなり。其使を出せしと云ふが苻秦へなる事も一考を要す。其後新羅の名は、久しく支那史の上に絶へて漸く宋元嘉二年(435 A.D.)に至り、日本より宋に與

えたる國書に、日本領土としての新羅の語あり。其他には僅に魏書永平元年(508 A.D.)の條に、朝貢せし國名の中に斯盧の二字を錄せるのみ。唐の貞觀の初に選まれし梁書に至り初めて新羅傳あり、其地東濱大海。南北與句麗百濟接。魏時曰斯盧。宋時曰斯羅。其國小不能自通使聘。普通二年。王名募秦。始使使隨百濟奉獻方物。其拜及行與高麗相類。無文字。刻木爲信。言待百濟而後通焉とあり。而して其國の位置より見るも、此頃以前に於ては高句麗百濟の如く私商の容易に交通しうべき國にあらざるなり。之を班固の漢書に三韓の語さへ未だ無きに關らず、其地理志中に、夫樂浪海中有倭人分爲百餘國以歲時來獻見云とせる倭人や、三國志以下に傳あり且つ漢代より支那に交通せし高句麗や、其他百濟に比すれば新羅の文化知るべきのみ。今日三國の事を傳ふる三國史記は、王氏高麗朝の半頃編纂せるものにして、高句麗と百濟とは不幸にも國家の覆滅と共に、其史籍も湮滅せりと雖、新羅の滅亡の際には其國史官が嘗て修飾せし史籍は連亘三十餘里の車馬の一に載せられて開城に運ばれしなるべく、史記は之を採て以て資料とせし者なるべし。此新羅史官が修飾せし新羅史籍を資料として書きし三國史記には上代新羅も他の二國兩様の開化を有せしが如く見ゆるに至れり。既に説きし如く高句麗の都たりし平壤も、百濟の都たりし扶余も、國滅亡の際一たび荒墟となり、殊に平壤の如きは、新羅時代には野人驅逐の場となり、其後は其地の要害の位置にありしを以て、或は戰場となり城塞となり、種々の土工も起されて、古墳以外のもの盡く湮滅せしなり。扶餘は其都たりし時期も永からざるなり。新羅故都慶

州にも新羅上代即眞德王以前のは、古墳の外月城あるのみ。尤も新羅遺物としては其果して新羅のものなるや否やに就て尙ほ研究を要する眞興王巡狩の二碑ありと雖も、之を高句麗の好太王碑に比すれば敢て誇りうるものにあらず。新羅へは音楽も伽耶より傳はり、善德王は工匠を百濟に求めて皇龍九層の塔を建立することを得たり。又慶州に於ける古瓦の如きも盡く印度紋様のものゝみにして、萩野博士が江東縣高句麗古陵にて發見せられし如き純粹なる漢式紋様のものは一も發見せられず。之を上代の古墳の遺物に見るに新羅上代の古墳も、外形に於ては日本もしくは高句麗のものに劣らざるものあれども、平壤附近の高句麗古墳の如きは其槨の構造新羅のものに優り、殊に其磚槨の如きは讚嘆の外なく、到底新羅のものゝ及ぶところにあらず。其遺物の如きも、日本及高句麗の古墳よりは鏡劍金環硝子品等の優秀なる支那工藝品を發見するに係らず、新羅の古墳よりは累々たる素燒土器を發見するのみ。

最も新羅の古墳も六世紀以後のものは日本高句麗に比敵する工藝品を藏することあるべし。

之を史籍及遺物に依りて推考するに、上代三國中最も進歩せる開化を有せしは高句麗にして、百濟これに次ぎ、新羅に至りては最も後れたる。而して新羅にては、第五第六世紀の交、即ち智證王法興王の頃高句麗を経て支那文化を輸入し、其國運と共に開化急激に進歩して、日本の開化に追及せり後、間もなく恰も日本の勢力が三韓に衰へしに乘じ、海上の通航權を得、直接に支那文明を輸入し、忽ち日本を凌駕し、半島に於ける日本の領土を全く奪ひ、其開化益々進歩し強健なる心身に新文化を攝取して頗る強く、遂に唐と結んで三韓統一の大業を

成就し、更に盛唐の文物を傳へ、我が奈良朝と相並んで一文明時期を作るに至りしものなり。終りに少しく日本と新羅との文化關係に就て述べんとす。支那古史に倭人とあるは、我が日本島住民の稱にして、此倭人なるものの中には、夫れ或は我等祖先に直線的系統を有せざるものなきにあらずとするも、其血は盡く我等に傳はり、其有せし文化は廢絶せし事なく、且つ之を遺物に徵するも、倭人と稱せられし者の間には、其風俗及文化の上に大差なかりしならんが故に、倭人の有せし文化は、國史を作れる我等祖先の文化として差し支へなし。偕て倭人は高句麗と同じく第一世より支那に交通し、支那本部及び樂浪より開化を傳へたり。既に述べし如く三韓につきて其語さへしるさるる班固の漢書は倭人につきて記述し、又三國志の如きも、新羅百濟につきては、三韓の國名中に斯盧伯濟の名を記するのみなるに、倭人に關しては詳細なる記事あり、其交通の舊き事以て知るべし。單に支那工藝品の二三を輸入使用せしとて、直に支那文化を有せりとなすべからざるは勿論なれども、交通の存ずるところ必ず文化の傳來あるが故に、交通は文化の輸入を意味す。我邦上代の開化は高句麗百濟よりも下にありしといふべからず。日本上代の開化は、日本に後れて半島に起りし百濟新羅を俟て、支那より遞傳し得たるものにあらず。尤も日本は其地位上、高句麗百濟の如く支那交通に便ならず、加うるに樂浪郡の滅亡後は、航海にも多少の困難生じたるべきを以て、遂には其有する支那文化或る期間づゝ後るゝ事となり、之を二國の遞傳によりて受くる事もあるに到りしと雖、日本は終に新羅より文化を傳へし事無し。第六世期初に至るまで、我

國の開化は新羅の上にありしのみならず、民族の風尚の如きは、三國のいづれにも決して劣らざりき、たゞ第六世期に至り、新羅に追到され、終に凌駕されしなり。

これの一大原因は、日本天皇は彼の三國君主の如く、支那より封冊を受くるが如き行爲を敢てしてまでも此大國と交通したまふ事なかりしにあり。支那より封冊を受くることを拒絶するは、或る程度まで交通の斷絶なるを以てなり。日本に於ける中央集權の發達と支那に於ける形勢の變化とは、支那に於て將さに隋唐文化の最盛時を產出せんとする文化の向上期に當て、日本支那の交通に障害を起せし也。日本は日本の屬國たる百濟を経て、支那文化を輸入せざるを得ざるに至りしは、徳川時代に於て琉球を経て明清貨物を得たると同じき國情なり。既に述べし如く、古墳遺物より見るも、日本の遺物と高句麗の遺物とは土器以外の高等工藝品頗る類似す。而して此等工藝品の多くは、支那製品もしくは支那系統のものにして、兩國が支那交通と開化との程度とを示すものなり。而して新羅の此時代の古墳には斯る高等なる工藝品を發見すること能はず。實に上代新羅は、支那とは私商の交通すら行ひ難き地位にありし也。

新羅古墳内より發見する土器を見るに、時代の溯れるものは、日本古墳内發見土器に酷似し、時代の降るに従ひ高句麗の影響を受けて、や、高句麗のものに近づくが如きこと、既述の如し。

此日本と新羅との上代土器の酷似することは、交通せる地方の間には存じうべき事にし

て、唯直接もしくは間接に接觸せし事を證するにすぎず。即ち隣國の間に存在し得べき類似のみ。然り而して日本特有の原始的風俗たりし曲玉管玉を佩ぶ事が、新羅は勿論全半島に嘗て存ぜざりし如き新羅上代の古墳と日本上代の古墳と全く構造を異にする如きは双方民族に大なる相違のありし證にして民族の關係を論ずる上に大に注意すべき一事なり。

明治四十三年十
二月二日訂正